春行寄興　横山峯雲

黄塵風颺似龍渦、
碧落花城春彩多。
何処迷人來萬里、
晨行巒峭渡山阿。

春行興を寄す　横山峯雲

黄塵風颺龍渦の似く、
碧落花城　春彩　多し。
何処よりか人迷いて萬里來たり、
晨に行く巒峭山阿を渡る。

（題意）

春の行楽に興趣を寄せる

（詩意）

地上では黄塵（黄砂）、いわば世間の俗事が風で舞い上がり、龍が渦巻いているかのようだが、
天の青空や桜花が咲いている街々は春の彩り豊かな景色に満ちている。
どこからかインバウンドの人々が血迷って遠くの国からやってきたが、
朝早くから出発して、日本の険しい山々や田舎を歩き廻るのだろう。

（注釈）

・黄塵：黄色い土けむり。中国からの黄砂
（＝観光客）。また、世間の俗事の意味もある。
・風颺：風が舞い上がること。高く吹きあげる。
・似龍渦：龍が渦巻いているかのように。
・碧落：青空。
・花城：花咲く街。古代中国は城郭の中が街であった。従って、「城」という表現は城郭都市、つまり町、街を言う。杜甫の「國破山河在，城春草木深。」も同様。「城」を城壁などと注釈しているバカ先生がいるが、日本の城とは意味が違う。どうも城跡の公園と誤解している。不勉強も甚だしい。

・春彩：春の景色。「彩」も単に色どりだけではなく、漢詩では風景、景色も表現。
・萬里：かなりの遠い距離を表現。萬里の長城しかり。一万里の意味では無い。
・晨：あさ。早朝。
・巒峭：「巒」めぐり連なる山々。やまなみ。「峭」切り立ってけわしい。
・山阿：「阿」山や川の曲がって入りくんだ所。まがりかど。隈（くま）。深い山の奥。

（平仄）

七言絶句。平起式。下平五歌の韻。○は平韻の文字。●は仄韻の文字。◎は押韻。韻脚は「渦多阿」。

○○　○●　●○◎（韻）
●●　○○　○●◎（韻）
○●　●○　○●●
○○　○●　●○◎（韻）

今回は、芥川龍之介が漢詩についての感想を書いているので、紹介しておく。芥川龍之介は自身も漢詩を作っているし、かなりの漢書籍も購入している。師匠の夏目漱石など明治の作家たちは子供時代から漢文漢詩の素養が必須だったようで、漢書籍を多く読んでおり、さらに中国を旅行して、その見聞を新聞や雑誌などに発表することが作家の金になる仕事でもあったようだ（夏目漱石、谷崎潤一郎など）。芥川龍之介も『支那游記』という旅行記を出版している。その中で、自分は谷崎潤一郎の中国の感想とは違うなどとも書いている。

「漢文漢詩の面白味　芥川龍之介

漢詩漢文を讀んで利益があるかどうか？私は利益があると思ふ。我々の使つてゐる日本語は、たとへ佛蘭西語の拉甸語に於ける關係はなくとも、可成支那語の恩を受けてゐる。これは何も我々が漢字を使つてゐるからと云ふばかりぢやない。漢字が羅馬字になつた所が、遠い過去から積んで來た支那語流のエクスプレツシヨンは、やつぱり日本語の中に殘つてゐる。だから漢詩漢文を讀むと云ふ事は、

過去の日本文學を鑑賞する上にも利益があるだらうし、現在の日本文學を創造する上にも利益があるだらうと思ふ。以下省略」

というわけだが、芥川龍之介は実利としても漢書籍から想を得て、小説を書いている（『杜子春』）。中島敦の『山月記』や『李陵』も同様。どうも、芥川龍之介はかなりの勉強家で古今東西の書籍を読み過ぎて（速読については普通の英文学書なら一日一二〇〇～一三〇〇ページは楽と答えている。ただし、一生の間に読める本はせいぜい三〇〇〇冊ぐらいとも言っている）、それを題材とした創作ばかりしたせいか、結局自分自身の中から創作を生み出せないことになってしまったようだ。いわば、創作の行き詰まりが「ぼんやりした不安」で人生破綻の原因か？芥川夫人が「お父さん、これで楽になれるわね。」と亡骸に声をかけたとか。ちなみに、上記の『支那游記』には、人生破綻に向かう予兆が各所に見られると、指摘する人もおられるようだ。

なお、『支那游記』では当時の中国の風物について、かなり批判的で、汚い、ケバ過ぎる、文化を破壊しているなど、バカにしたような感想ばかり述べている。ただし、中国女性は美しいなどと言っているところもあり、以前からかなりの関心があったためか、京劇にも行っており、その感想を書いたりしている。一体、何のために行ったのか分からないような内容だが、後に近代中国の歴史に名を残している若き革命家や軍人、政治家に会って議論しているので、その議論の内容や感想が面白い。まあ、新聞社から取材依頼された世間で話題の作家が有ること無いことをいやいやながら義務（金のため）で書いたものと思えばよい。興味のある方は読んでみてください。

（令和六年四月十日）